万葉集巻十一・十二

——序詞の発想と民謡性とに関連して——

森　淳司

一　序

万葉集巻十一・十二は、従来より、その成立は比較的古く、その内容は民謡性のかなり濃い歌巻とみられてきたが、近時は、新しい時代の、天平期に入ってからの創作歌を多く含む歌群ともいわれている。またこの両巻は、その成立が、同時かあるいは別個かということをめぐっての両巻の関係についてもいろいろと論がなされている。

巻十一・十二は、その目録に、「古今相聞往来歌類之上・同下」とあるし、万葉集の他の巻には例のない正述心緒寄物陳思の二分類がなされているし、この目録の記述や編纂の態度の共通性からみても、当時両巻は、上と下に分かれた一つのものとして成立したし、またそうみなされていた、いわば姉妹編とでもいわれるものと思われる。この両巻の形成についても、それがたとえ編録時期に多少の先後があったとしても、この二つの巻は、ほぼ同時期に蒐集された諸資料をもととして、先の巻十一の撰定の際には、その続巻があらかじめ予定されていて、両巻へ収めるべき歌のふりわけなども、事前に配慮された上で、巻十一がなり、ひきつづいて巻十二が編まれたものと考える。またこの二つの相前後して成立した歌巻に収められた歌は、天平期に入ってからの都人達の詠作と、それに合わせて、より古い、あるいはそれと併行して歌われていた民謡的要素のかなり濃厚な歌群だったと思われる。

本稿では、これら諸問題のうち、編纂や成立に関することは別に考えることとし、巻十一・十二の両巻を一つのものとする立場に立って、その中に収められた歌の質について、とりわけ民謡的発想をもつ歌群を対象に、一般に序詞といわれている発想のささやかな一面を通して、両巻の民謡性について考えることとする。

二　万葉集中の序詞をもつ歌

万葉集の歌の中には、その発想にあたって、即境的あるいは嘱目的な外界の自然やその状況などを景的に提示したりして、それにかかわらせ、それから転換させて、心意を表出する歌が多くみられ

る。そしてその提示の部分に、一般に序詞とよばれているものをもつ歌がかなり多い。そして、その序詞は、多くは第一句、第二句全体に、もしくは第一、二、三句にわたり、まま第一句より第四句に及ぶものもみられる。[注1] これらの序詞をもつ短歌体の歌を、かりに竹内金治郎氏の調査[注2]に従ってすべて摘出してみると、本稿末尾に歌番号を付したものが求められる。

万葉歌の、この序詞をもつ歌の中に、民謡ないしは民謡的要素をもつ歌の多くが包含されていることは、すでに大方の首肯されるところと思われるし、また集中の創作歌でも、序詞をもつものの多くは、多かれ少なかれ、何らかのかたちで、民間で伝承されていた歌謡にどこかで繋がっていたと思われるし、たとえまったく独創的な序詞が詩人達の創造によって新たに創出されたかに思われる例があったとしても、その数はごく少ないものであろうと考える。

いま、本稿末尾に掲出した序詞をもつ歌の一覧を整理して、巻別の歌数と、各巻所収歌に対する頻出率を換算して、表示してみると次のようになる。

巻別	歌数	比率%	全歌数
1	6	9	68
2	15	10	131
3	9	6	229
4	37	12	302
5	1	0.7	104
6	10	7	132
7	19	6	324
8	15	6	236
9	5	4	125
10	52	10	532
11	135	**28**	940
12	98	**26**	383
13	3	5	60
14	71	**30**	238
15	9	4	200
16	6	6	92
17	8	6	127
18	3	3	97
19	4	3	131
20	23	11	218

集中、序詞をもつ歌の含まれる率の、もっとも高いのは巻十四の三〇パーセントであって、それに次ぐものは、巻十一・十二の二八・二六パーセントである。この三つの巻は断然他巻を引き離していて、万葉歌の序詞をもつ歌全五百三十首ばかりのうち、この三つの巻でその大半の三百余首を占めている。他巻は巻一、二、四、十、二十などの率のやや高い巻でも、それら三巻の三分の一以下で、きわめて少ない。

巻十四は東国歌蒐集の一巻で、その中に、従来いわれている都人の旅の作[注3]や、近時いわれる土地の族長層や富農階級の人などの作歌が所収されていても[注4]、そのおおかたは庶民の間に生まれ口誦され伝えられていたものであろう。この巻十四が、もっとも多くこの種の歌をもつことは、この序詞をもつ歌が、まず民謡的性格と深くかかわることを物語ってもいる。

また、この巻十四東歌歌群とほとんど匹敵する高率で、巻十一・十二が等しく続いていることは、この巻十一・十二が、万葉集中その民謡的要素において、東歌に次ぐものであることを暗示しているようである。

しかも、もともと巻十四は、東国歌集録の巻で、巻十一・十二は大和を中心とした近畿周辺のいわば西国歌を収めた巻であって、この東西の地域的な隔りにもかかわらず、この二歌群が、序詞という発想様式を通して同一線上に並ぶことは、その方処的相違を越えて、そこには、歌の表出の場や機能や、歌の内実において、共有的等質性がみられるのではないかとも思われる。そして、その類同性の何よりのものに、両歌群の民謡性をあげ得るものとわたくしは思う。本稿はもとより、巻十一・十二を東歌一般と照応させつつ、その共通面を指摘して巻十一・十二の民謡性を論ずることが主旨ではないので、東歌との関連はしばらく措いて、次に、巻十一・十二や

東歌以外の諸巻の中で、たまたまみられる僅少例の序詞をもつ歌の側から、その歌例に即して、この問題を考えてみよう。

三　作者判明巻中の序詞をもつ歌

前表でみると、巻十一・十二と巻十四以外の巻は、序詞をもつ歌がきわめて少ない。特に作者判明の巻五、六、九、十五や巻十三の短歌や、巻末四巻などにはそれのみえる率が低い。巻末四巻中、巻二十のみはその歌例二十三首をもつが、それは防人歌中にみえるものが多く、それを東国歌の類とみれば、他とかわりはない。

いま、作者判明歌巻中、古撰の巻とみられる巻一、巻二と、それに継ぐものと思われる巻三、巻四の四つの巻と、防人歌を除く巻末四巻から、序詞発想の一つの様式と思われる、いわゆる尻取式に、序詞から本意への転換のなされる歌をすべて拾い出してみると、次のごときものがあげられる。

巻1・五四、五六
巻2・一一四
巻3・三六二、三六二（或本歌）
巻4・四九一、五一三、五三六、五七五、五八〇、五八八、六二二、七九一
巻17・三九三一
巻18・四〇八七
巻19・四一五二
巻20・四四五四、四四七六、四四七八、四四八一、四五〇五

作者は巻一から巻四までのものは、順次、坂門人足、春日蔵首

わずか二十首ばかりの歌の中で、そのほぼなかばは何らかの関係が予想される。これらの歌をみると、(1)の(イ)(ロ)や(2)の(イ)(ロ)のように、おそらくはもとは一つの歌であったものが、いささかの歌句の小異をきたして、或本にみられたり、あるいは作主を異にして伝えられたりしたと思われるものと、(1)の(ハ)(ニ)や(3)の(イ)(ロ)(ハ)の歌のように、歌の主意がまったく異なる別の創作歌でありながら、類似の序詞を冠して、そのかたちを等しくしているものとがみられる。

前者のようなものは、おそらくは広く歌い継がれ歌い伝えられていたものが、その過程で、いくらかの異同を生じ、それぞれに作者が仮託されたりしたものと思われるし、後者のような歌は、当時一般に伝承され口誦されていたそのような歌をもとにして、別な意を表現するまったく新しい歌として歌人達によって詠作されたものとみられる。ここにはまず、尻取式の歌の中から、巻も万葉集の前後それぞれ四巻に限り任意的でなく全量的に示してみたが、同音でしかも義を異にする語を用いて、序詞から本意への転換をみせる歌なども、作者判明巻の中では民間の歌謡と思われるものに作者が仮託されるような前者のような例と、あるいはそれをもとにして、新作がなされる後者のような場合とに分けられる。

〔橘の　蔭踏む道の〕　やちまたに　物をそ思ふ　妹に逢はずして（2・一二五、三方沙弥）

〔橘の　本に道踏み〕　やちまたに　物をそ思ふ　人に知らえず（6・一〇二七、豊島采女）

これなどは歌句にかなりの相違があるものの、前者の例であり、主意の部分「物をそ思ふ」は変容を遂げていない。なおこの二首目の歌には左注が次のように付されている。

右の一首は、右大弁高橋安麻呂卿語りて曰はく、故豊嶋采女の作なりといへり。但し、或る本に曰はく、三方沙弥の、妻苑臣に恋ひて作る歌なりといへり。然らばすなはち、豊嶋采女は、当時当所に此の歌を口吟へるか。

この左注が案じているように、時にあたり、所に従ってこの歌などは「口吟」われていたものであって、やがて作者を伴なうようにもなり、某人作と伝えられたということを左注自身が証していよう。このような前者に類する歌は他にもみられる一方、それより多く、次のようなものがしばしばみられる。

〔ささなみの　志賀さざれ波〕　しくしくに　常にと君が　思ほせりける（2・二〇六、置始東人）

〔奈呉の海の　沖つ白波〕　しくしくに　思ほえむかも　立ち別れ去なば（17・三九八九、大伴家持）

〔春日野に　朝居る雲の〕　しくしくに　我は恋ひ益る　月に日にけに（4・六九八、大伴像見）

これらは、序詞も本意も更にいっそう、それぞれの場に合うように異なって詠出されている。しかし、それにもかかわらず、広く一般に流布し慣用されていたであろう「しくしくに」という序と本意をつなぐ語を共にして心情を陳べている。わたくしは、この「しくしく」の一語は、民間におそらくは行なわれていた歌謡のことばのもたらしたもので、それを用いてそれぞれまちまちな宴などの歌として作られた後者の例に加えられるものと思う。

序詞をもつ作者判明歌巻の歌のそのほとんどは、その表現手法の相違をはじめ、歌の場や機能の相違により歌意その他さまざまな与件が介在して、伝承されたり、創作されたりしているものである

が、おおかたは、このような二通りのあり方に分けられる。そして、その程度の濃淡深浅はあっても、民間の歌謡の世界と、どこかで、何らかのかたちで、繋がっているものと思う。そしてそれらは、しばしば相互に、万葉集の作者判明諸巻の中に類似する歌や或本歌をもって収められている。

しかし、その相互の歌の類同は、実は作者判明歌巻の類歌にみられる例以外に、あるいはそれよりもずっと多くの歌例を巻十一・十二や巻十四などにみることができる。

四　作者判明巻と未詳歌の交流

前節であげた赤人作と伝えられる「なのりそ」の歌は、その歌句をほとんど同じくして、

〔みさご居る　荒磯に生ふる　なのりその〕　よし名は告らじ
　親は知るとも（12・三〇七七）

と、巻十二にみえる。また、「なのりそ」の生ふる荒磯に地名などがついたり、末尾の句を異にして、

〔住吉の　敷津の浦の　なのりその〕　名は告りてしを　逢はなくもあやし（12・三〇七六）

〔志賀の海の　磯に苅り干す　なのりその〕　名は告りてしを
　何か逢ひ難き（12・三一七七）

となっているものもあり、「なのりそ」が「なはのり」となったりもして、

〔わたつみの　沖に生ひたる　なはのりの〕　名はさね告らじ
　恋ひて死ぬとも（12・三〇八〇）

など巻十二だけでみても、数多くの類歌をもつ。

また、同じく前節の余明軍、藤原久須麻呂、橘諸兄などの歌の「菅の根の　ねもころ」の例にみても、「或本」歌「一云」を伴なったりして、

〔浅葉野に　立ち神さぶる　菅の根の〕　根もころ誰が故　我が恋ひなくに（11・二八六三）

〔誰が葉野に　立ちしなひたる　菅の根の〕　根もころ　誰が故
　我が恋ひなくに（11・二八六三・或本歌）

〔見渡しの　三室の山の　石穂菅〕　根もころ我は　片思ひそする（11・二四七二）

〔見渡しの　三諸の山の　石小菅〕　根もころ我は　片思ひそする（11・二四七二・一云）

とあったり、また菅が松や香樹（むろのき）になっているものに、

〔豊洲（とよくに）の　聞の浜松〕　根もころに　何しか妹に　逢ひ言ひそめけむ（12・三一三〇）

〔磯の上に　立てる香樹〕　根もころに　何しか深め　思ひそめける（11・二四八八）

とみられたりもしている。ここには、作者判明巻などで慣用された「すがのねの　ねもころ」以前の、もっとその土地に密着する序を提示して本意を表出して恋情が訴えられているようでもある。以上の「根もころ」の歌はすべて人麻呂歌集略体歌群中のものであるが、巻十一・十二はこの集の歌をはじめとして、かなり色濃く民謡の世界の声を聞くことができるように思う。

また、同じく前節の置始東人や大伴家持、大伴像見などの詠にみえた「しくしく」の語をもつ歌は、これも人麻呂歌集略体歌などに

〔是川の　瀬々の敷波〕　しくしくに　心は妹に　乗りにけるかも（11・二四二七）

〔飼飯の浦に　寄する白波〕　しくしくに　妹がすがたは　思ほゆるかも（12・三二〇〇）

などとみえ、このような歌々が、作者判明巻の先の歌人官人達の宴席歌などに取り入れられることとなったものと思われる。

勿論、作者判明歌巻の序詞をもつ歌は、巻十一・十二にのみ深くかかわるとはいえない。たとえば、但馬皇女の作と伝えられるものや、吹芡刀自の歌として伝えられる次のような歌は巻十にまったくの同一歌として、あるいは下句を異にしたりして、収められている。

〔秋の田の　穂向きの寄れる〕　かた寄りに　君に寄りなな　言痛くありとも（2・一一四、但馬皇女）

〔秋の田の　穂向きの寄れる〕　かた寄りに　我はもの思ふ　つれなきものを（10・二二四七）

〔河の上の　いつもの花の〕　いつもいつも　来ませわが背児　時じけめやも（4・四九一、吹芡刀自）

〔河の上の　いつもの花の〕　いつもいつも　来ませわが背児　時じけめやも（10・一九三一）

などは「しくしく」の例などよりはいっそう深く結びついていて、ことによると巻十の歌が流れて作者がそれぞれ仮託されて、作者判明巻にも収められた前記前者の例と思われるものである。

ところがこのような例は必ずしも多くなく、前表の序詞をもつ歌の含まれる歌巻の率の多寡は、そのままこのような同一歌や類歌の交流交渉の比率に比例する。このことは、やはり巻十一・十二が、より濃く民謡的庶民的色彩と様相をもつことを意味しているようである。

ただここで注意したいことは、巻十のこのような例は別にして、巻十一・十二などにみられた「なのりそ」や「菅の根の」や「しくしく」のような歌例は、しばしば作者判明歌巻の歌人達に単なる修辞的な序詞として愛用されるようになると、それにつれて、もとの民謡的性格を漸次喪失して、その要素がますます稀薄になってゆくということである。そしてついに、「菅の根の」などは「すがのねの」という「ねもころ」を引き出す単なる枕詞として用いられるようになると民謡性の片鱗さえうかがえぬものとなる。わたくしは序詞をもつ歌の多くのものが多かれ少なかれ民謡的要素を背負う発想と無縁でないことを述べたが、その源流源泉ともいうべきものを求めれば万葉集中では巻十一・十二にたどりつくし、またその拡散、解消されて行く一方の端に、枕詞の常用に行きつくように思うが、枕詞については後に譲ることとして、巻十一・十二の民謡性を別な面から再び追ってみたいと思う。

五　巻十一・十二の民謡性

(1)〔湊葦に　交じれる草の　知り草の〕　人皆知りぬ　我が下思ひは（11・二四六八）

(2)〔道の上の　いちしの花の〕　いちしろく　人皆知りぬ　我が恋妻は（11・二四八〇）

(3)〔道の辺の　いちしの花の〕　いちしろく　人知りにけり　継ぎてし思へば（11・二四八〇・或本歌）

これらは人麻呂歌集略体歌より巻十一に採録せられたものである。

この歌の序詞の中の焦点ともいうべき「知り草」も「いちしの花」も、この歌の本意ともいうべき「人皆知りぬ」の句も、共に万葉集中他に求められない用語である。

「しり草」は諸注では、『和名抄（十）』に「藺」とあるものとされ、「…海辺沙地浅水のところに生し、編みて席とし、夏月褥に代へ、尻にしくべきものなればしりくさといふなり…」（『動植正名』）などの記事をあげて説明している。

(1)の歌の場合、この歌の背景には「しりくさ」を湊の葦に交じって育つ草とみてとっている人達が、「海辺沙地浅水」といった低湿地に生活していて、夏ともなればその「しりくさ」を苅り取って敷いたであろうことなどが想像される。

集中には男女の二人だけの祕めた恋が、親や近隣の他人達によって露顕されることをおそれたり、あるいはそれがあらわになって苦しんだり、恋を断念したり、時にはかえってひらきなおったりする歌がかなりみられる。この歌もそんな折の意を表出するが、きわめて明るく軽く、しかも解放的なひびきがあり、「他人に知られたよ」という主意を歌うにあたって、この湊葦の中の同音の「しり草」を持ち出したあたりに、生活背景に密着する発想と、「下思い」というやりばのない切なさを中にもちながら、しかも人の意表をつくものが表出されたと思われる。また、それでこそこのような歌は、村人達に共感をもってむかえられたことと思われる。そしてこんな歌が、この湊近くの、葦辺の藺を苅って夏を迎え送る部落の集いなどで歌われる時、ことによるとおどけたしぐさなども手伝って、喝采を博したのではなかったかと思われる。

(2)の歌はその点やや趣きを異にする。この歌は同じく「人皆知りぬ」という意をいうにあたって、「いちしろく」という修飾的説明句をもつ。また「いちしの花」「いちしろく」「人皆しりぬ」といっそう口唱性を有しながら、(1)にくらべ、その歌の場は、もっと広く通用しそうな、「道の上」であって、花も、それが諸注にいう「ぎしぎし」か「いちし」か「まんじゅしゃげ」のどれであるにしても、しり草の特殊な生育地から解放されて、道のほとりなど、どこにも見られるもので、その点、常套的な慣用性を獲得し得る可能性をもっていたはずだと思われる。

このようないささかのちがいにもかかわらず、両歌は広くて狭い農漁村の男女の恋の障碍を、やはり明るくたくましく、勇敢に大胆に四句切れの断定でいい切っている。このあたりに、民謡的庶民的な性格を多分にもつこれらの歌があると思う。しかし、前節の「ねもころ」や「しくしく」や「なのりそ」の歌などのように、このような表現は、作者判明歌巻その他に、浸透したり模倣されたり、もてはやされたりしていない。そこには、おそらくかえって、これらの歌の口誦性にもかかわらず、それを阻み拒む垣根があったのではなかったろうか。

それは、(1)の場合しり(尻)草によるだろうし、(2)のいちしの花が、ことによるとある一地方の限られた地域内での名だったことなどに起因することも考えられようが、それよりいっそうこの恋情の表出が、とりわけ(1)、それにつづいて(2)などでは、苦脳や嘆息の綿々とした下思いのかたちをとらないで、単的率直に「人皆知りぬ」と断ずるところに、心のひだを婉曲に、微妙複雑に表現する傾向にすでに

なりつつあった知的な都人官人達の反撥や抵抗があって、それが大きな溝となっていたのではなかったかと思う。ここらにそれに対して(1)(2)の歌などのより濃い民謡的性格がみられると思うのである。

(3)の歌は(2)の或本歌であるが、(1)(2)とはかなりその点で距離を感ずる。第四句が、「人知りにけり」という詠嘆の抒情をとり、末句が、(1)(2)では「我が下思ひは」「我が恋妻は」と「人皆知りぬ」の主題や対象を捨げ出しているのに対して、それをいわずに苦しみの状を表現する。この或本歌(3)は、すでに一歩、都人の詠歌に移り変わろうとしている。

(イ)嘆きせば　人知りぬべみ（山川の）滝つ心を　塞かへてあるかも
（7・一三八三）

(ロ)八千戈の　神の御代より乏し妻　人知りにけり　継ぎてし思へば
（10・二〇〇二）

(ハ)日並べて　人知りぬべし　今日の日は　千歳の如も　ありこせぬかも（11・二三八七）

(ニ)（山川の）滝に益される　恋すとそ　人知りにける　間なくし思へば（12・三〇一六）

ここにあげた四首は、「人知り…」の集中の短歌の他のすべてである。(イ)は巻七の「寄レ河」の一首、(ロ)は巻十人麻呂歌集非略体歌群中の「七夕」の一首、(ハ)は巻十一、人麻呂歌集略体歌群中のもの、(ニ)は人麻呂歌集以外の寄物陳思歌群のもの、(イ)は人に知られることをおそれ、嘆きを抑えていると歌うが、「山川の　滝つ心」と表現されていても、いっこうにその嘆きのはげしさは伝わってこない。(ロ)は(3)と末句を同じくする。恋々とした嘆き故に人に知られたというが、やはり強く訴えるものはない。(ハ)は毎日逢えば人に知られよう、せめて今日の（逢っている）日が千歳であったらという。理に過ぎる歌といえよう。(ニ)は(イ)の発想と類似で、(イ)が露顕されていないのに、(ニ)は「山川の　滝に益される」恋を「間なくし思」ったが故に知られたというものである。これら四首は、民謡的背景も要素もすでに失われようとしている。都人的発想の側にあるものとみられよう。作者未詳巻の中にも、かなり多くこのような歌々が収められている。

しかも、この中の巻十・巻十一の歌は人麻呂歌集非略体歌と略体歌の各一首である。

本稿は万葉集中の序詞の表現を通して民謡的要素を求め、その源泉ともいうべきものを東国歌に対する西国歌ともいうべき巻十一・十二に求め、その中でも、とりわけ人麻呂歌集略体歌群などをはじめとして民謡性の多分にみられる歌を指摘し巻十一・十二の民謡的一面を考えた。しかし、その中にもすでに、都人の手や心の浸蝕されていく半面を無視することができないように思う。

万葉集巻十一・十二の内容論は、それが民謡的歌群か、さなくば都の官人の創作歌かではなく、どの程度、民謡的要素をもつ歌を収めているか、あるいはその一面、どんなに創作歌的傾向をもつものがみられるかに問題はしぼられてくるように思われる。そして、今のところわたくしは、都人的要素が優位にあるものと考えている。ただ、両巻に含まれている人麻呂歌集略体歌群は、これもかなりの都人的発想の面をもちはするものの、おそらくは民謡的性格が創作歌的要素とあいなかばして共存していることと思う。人麻呂歌集を除く一般の両巻の歌群はちょうどそれと相対して、創作歌的発想を

より多くもつものと思う。この両要素が混交錯綜しつつ正述と寄物という表現面より整理されたのが巻十一・十二であったといえよう。

なお人麻呂歌集略体歌の発想のことについては別に稿を草した。[注5] また本稿は、紙幅の都合で、後半を続稿に譲った。[注6] いずれ併読いただければ幸である。

注1　万葉集の短歌の中、序詞が第一句より第四句にわたるものは、11・二四五六、11・二六三八、11・二六九七、二六九七或本歌の四例みられる。すべて巻十一の例である。また、第二、三句、あるいは第三、四句に序詞をもちいるものはかなり多い。しかしそれらは本稿ではとりあげなかった。

2　竹内金治郎氏の調査は『万葉集における修辞の研究』の「序詞」の項にみられるが、未刊のままであるので、以下その歌の番号をすべて記した。これは第一、二句、第一、二、三句に序詞をもつ万葉短歌のすべてである。検索して歌についてみられたい。ゴチの歌番号は第四句で本意を述べて終止するものである。

巻一・37・**54**・**56**・60・61・**83**

巻二・88・**92**・93・96・97・98・99・100・110・**114**・119・**122**・**125**・201・206

巻三・325・**326**・359・**362**・**363**・377・397・422・437

巻四・487・490・491・495・496・501・502・512・513・**522**・**526**・530・531・533・**536**・**551**・558・568・**575**・580・**588**・594・600・617・662・663・668・675・677・688・698・699・711・758・**760**・761・791

巻五・858

巻六・915・947・962・991・993・997・1024・**1027**・1041・1056

巻七・1070・1100・**1114**・1146・1244・1245・1328・1329・1334・1356・1381・1385・1388・1389・1393・1398・1399・1406・1413

巻八・**1449**・1451・**1454**・1503・1536・1564・**1608**・**1611**・1613・1615・1617・**1627**・1630・**1655**・1660

巻九・1710・1723・1745・1769・**1773**

巻十・1818・1893・1895・1896・**1897**・1898・1901・1907・1908・1909・1912・1913・1919・**1923**・1926・1927・1931・1935・1979・1980・1988・2086・**2241**・2242・2246・2247・**2254**・**2256**・**2258**・2263・2264・2267・2268・2269・2270・**2272**・2277・2281・2283・2291・2294・2300・2307・2308・2335・2337・2339・**2344**・2345・2346・2347・2348

巻十一・2407・2415・2417・2423・2424・2426・2427・2428・2430・2431・**2434**・2435・2436・2437・2439・2440・2444・2445・2449・2450・2451・2453・2456・2459・**2461**・2466・2467・**2468**・2469・2470・2471・2472・2477・2478・**2480**・2482・**2486**・2487・2488・**2490**・2493・2495・2496・2497・2500・2502・2512・2622・2623・2624・2633・2639・2643・2645・**2646**・2647・2649・2650・2651・**2652**・2656・2658・**2664**・2668・2671・2672・**2674**・2675・**2680**・2694・2696・2687・2700・2702・2704・**2707**・2708・1710・2711・2713・2714・2715・**2716**・**2718**・2720・2722・**2725**・**2726**・2727・2728・2729・**2730**・2731・2732・2735・2736・2737・2738・2749・2740・2742・2744・2745・2747・2748・2749・2751・**2752**・**2753**・2754・2755・2757・**2761**・2762・2763・2766・2767・2768・2770・2774・2775・2778・2779・2780・2781・**2791**・**2795**・2796・2797・2798・2801・2803・2804・2805・2822

巻十二・**2855**・**2860**・2861・2862・2863・2965・2966・2968・2970・2971・2972・**2976**・**2981**・2990・**2991**・2992・2993・2997・2998・3001・3003・3005・3008・3009・3010・3011・3012・3014・3017・3018・3019・3020・**3022**・**3023**・3024・3025・3029・3037・3039・3041・3042・3046・3047・3048・3049・3050・**3051**・3052・3053・3057・**3063**・3064・3065・3066・3067・3068・3070・3071・3072・3073・2075・3076・**3077**・3078・3079・**3080**・3081・**3084**・3085・**3087**・**3088**・3089・3090・3092・3093・3096・3101・3127・3130・3157・3159・3160・3165・3167・3170・3171・3172・3174・3176・3177・3197・3198・32

00・3207・3210・3219・3220
巻十三・3228・3244・3267
巻十四・**3354**・3360・3361・3365・3368・3370・3373・3375・3377・3378・3382・3388・**3390**・3391・3392・3393・**3396**・**3407**・**3410**・3412・3413・3415・3416・3417・3418・3420・3423・3428・3431・3432・3433・3445・3449・3462・3473・3479・3482・3488・3492・**3495**・3497・3498・3499・3500・3501・3503・**3504**・**3505**・3507・3508・**3511**・3513・3518・3523・3526・3529・3530・3532・3536・3537・3539・3542・3543・**3547**・**3551**・3552・**3555**・3559・**3560**・**3562**・**3563**
巻十五・3578・3603・3605・**3619**・**3626**・3634・3652・3660・3663
巻十六・3807・3818・3836・3848・3855・3874
巻十七・3899・3908・3931・3932・3986・3987・**3994**・4002
巻十八・4033・4045・4064
巻十九・**4152**・4213・4217・**4218**
巻二十・**4298**・4309・4317・4326・4338・4339・4352・4369・4386・4387・**4389**・4390・4420・4454・4457・4476・4478・**4481**・4486・4494・4503・4505・4508

3　武田祐吉氏『上代国文学の研究』など
4　加藤静雄氏『万葉集東歌論』参照
5　拙稿「巻十一―都人的発想と民謡的発想と―」（『柿本朝臣人麻呂歌集の研究』所収）参照
6　拙稿「万葉集巻十一・十二の発想―その民謡性を求めて―」（『万葉の発想』所収）

巻十四と巻二十のあいだ

加藤静雄

一

与えられた題目の意味は、巻十四が東歌であるという事実からすれば、当然それに対置されるものとして、巻二十とはいっても防人歌にのみ限定して考えることは許されるであろう。本稿では、この前提に立って考えることとする。

東歌と防人歌との現象面における相異点は、東歌が東国における民謡といわれ（筆者は必ずしもこの「東国の民謡」という表現に全面的に賛意を表するわけではない[注1]）、作者についても、作歌事情においてもほとんど不明であるのに対して、防人歌は一応作者の氏名も作歌事情もおぼろげながら判明しているということであろう。しかし、防人歌の作者の氏名が判明しているというそのことは、集団性に根ざした民謡的なものから、個の文芸としての創作性にかかわ